

主日の福音 2026/9/20(No.1434)

年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

最後の一時間、最後の一人まで機会を与えたい



今週、私たちの小教区では敬老者の祝があります。対象者の皆様、お元気でミサに参加しておられること、本当に喜ばしいことです。心から神に感謝いたしましょう。そして、今日からまた、命を見守り続けてくださる神に信頼を置いて生きるとあらためて誓いましょう。

今回、巡回教会で主任司祭はミサをささげておりますが、本教会では敬老者のお祝いとともに、結婚五十周年を迎えた夫婦をお招きしてお祝いすることになっています。こちらの教会も含め、五十年の長きに渡り、結婚生活を完成させる歩みを続けてこられたことに、敬意を表したいと思います。

さて、福音朗読ですが、マタイ福音書の 20 章が選ばれました。

「ぶどう園の労働者」のたとえで、あらすじはよくご存知でしょう。ぶどう園の主人は、職を求めて人が集まる場所に、夜明けから時間を変えて出かけ、それぞれの労働者に一日一デナリオンの約束で労働者をぶどう園に送りました。このぶどう園の主人はもちろん父なる神がモデルなのだと思います。

この主人は実に寛大でした。どの時間に雇った人にも、一日一デナリオンの約束でぶどう園に送ってくれたのです。「神の寛大さ」「慈しみ深さ」がそこに現れていると考えて良いでしょう。神は、どの人にも分け隔てなく、神のものさしで、「寛大さ」と「慈しみ」を人間に示すのです。

神の寛大さは、人間には到底理解できません。なぜなら「神の思い」は人間を超えているからです。どんなに遅れてぶどう園に雇われても、その人も一日分の賃金を受け取ることができます。それが「神の思い」です。ただ、それを人間は時として理解できず、批判し、非難するのです。その代表となったのが、いちばんはじめに雇われた労働者、夜明け頃に雇われ、「まる一日、暑い中を辛抱して働いた」(20・12) 人たちでした。

この人たちの言い分は、「人の思い」ではありますが、朝から働いた人からすれば、「どうして自分と最後の一時間の人が同じなのか」と思うのは当然です。一デナリオンは一日の日当だったと言われています。現在の日当を想像するとうまく当てはまらないので、まあ 5000 円くらいだったとしましょう。

「人の思い」で考えると、「神の思い」はいくら考えても理解できるものではありません。11 時間働いても、1 時間働いても同じ賃金ですから、憤慨するのは当然です。しかし先に述べたように、「神の思い」は「人の思い」では測れないのです。人間社会でも、「神の思い」に少し触れる機会があります。たとえ自分にとって好ましくない人であっても、その人の命を軽く扱ってよい理由にはならないはずですが、扱いに差が出ることも実際には起こります。

少し、体験する機会があったとしても、それでも「神の思い」は「人の思い」をはるかに超え、理解し難い。だから神はイエス・キリストを遣わして神の思いの一端に触れさせてくださった。そんな中で、私たちにできることがあるとしたら、「神の思い」を教会で深呼吸して帰ることくらいではないでしょうか。

ミサの中で、ミサ前のゆるしの秘跡の中で、ミサ中予定している敬老者の祝福式の中で、「私たちは人の思いに立つよりも、『神の思い』に立って物事を考えるようになりたいです」と、あらためて決意することではないでしょうか。

ぶどう園の主人は、最後の一時間まで、労働者を探しに行って、ぶどう園に送りました。最後の一時間、最後の一人まで、「神の思い」に触れさせようと必死に探し回っています。私たちも、「神の思い」に触れるために、今日こうして聖堂に招かれたのです。神の思いに触れさせようとして招かれた神の息吹を深呼吸して、また生活に戻りましょう。

実生活は「人の思い」で判断し、時には厳しい態度を取ることもあるでしょう。そうした社会に、「神の思いを深呼吸した私たち」は、今度は神の息を「吐く」ために派遣されます。ほんの僅かでも、「神の思い」に人々が触れることができるよう、いただいた神の息を吐く。神の思いに寄り添った態度を人々に示していきましょう。

今日、私たちはこの聖堂で、神のみこころを深呼吸しました。教会生活が長い人も、短い人も、同じ一デナリオンの神の息を深呼吸しました。「神の思い」言い換えれば「みこころ」が天に行われるとおりに地にも行われますように。現代にも「神の思い」は社会に変革を与える力があることを、私たちが示すことができますように。

年間第 26 主日(マタイ 21:28-32)